

令和2年、9月定例議会にあたり、自由民主党・無所属文京区議団を代表しまして、私、田中としかねが、質問をさせていただきます。

新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、わずか数か月ほどの間にパンデミックといわれる世界的な流行となりました。日本でも新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく緊急事態宣言が4月7日に政府より発令されました。東京都からは都民に対して「不要不急の外出を控える」といった要請がなされました。「家で過ごそう (Stay Home)」という呼びかけのもと、感染拡大防止のため、通院や食料の買い出しなどといった「生活の維持に必要」な場合を除き、原則として外出を自粛しようということになったのです。

期間中、私は、児童・生徒またその親御さんたちから「お家でどうやって過ごせばいいですか？」という相談を受けることも多かったのですが、「勉強してください」という回答以外を期待されてのことだと思いましたので、「こんなときには歴史に学びましょう」とこたえていました。時は14世紀、場所はイタリアのフィレンツェです。ヨーロッパでは「黒死病」といって恐れられた感染症ペストが蔓延していました。その最中、都会での接触を避けるため、郊外の別荘にこもることにした男女10人がいます。命が脅かされている不安を振り払おうと、10人はそれぞれ毎日1つずつ物語を語り始めます。それが10日間続いて全部で百の物語がつむぎだされるというお話です。ルネサンス期を代表する文学者であるジョヴァンニ・ボッカッチョの著書『デカメロン』の内容になります。日本に先立って緊急事態宣言が出されたイタリアでは、このボッカッチョの『デカメロン』を読み直してみよう、という動きが広がりました。きっかけは「昔の人達はこんなときどうしていたのだろうか？」という問いかけからだそうです。インターネット上にはこんな声が聞こえてきます。「全部封鎖されてしまった。どこにも行けない。でも毎日の忙しさの中で、思うようにできなかったことに時間を割くことができる。もしかしたらそんなに悪いことでもないのかもしれない」と。不安の中でもできることを一つずつ始めようとしているイタリアの人たちの声です。

近代科学の創始者ともいわれるアイザック・ニュートンをご存知でしょう。力学、数学、光学の三つの分野で打ち立てられた「三大業績」で有名です。1643年に英国で生まれたニュートンは1661年にケンブリッジ大学に入学しました。ところがその学生時代にロンドンではペストが流行し、ケンブリッジ大学も休校となったのでした。ペストを避けてニュートンは実家のある故郷に戻っています。そこで過ごした18カ月はゆとりをもって思索する時間にあてられました。リンゴが落ちるのを見て万有引力の法則に気づいたという有名な伝説は、このタイミングで生まれたものです。ニュートンの三大業績はすべてこの時期に着想されたといわれています。ニュートン自らこの期間のことを「創造的休暇」と呼んでいるくらいです。

我われは今まさに、イノベーションを起こすべきタイミングにいるのではないのでしょうか。新たなものを創造し、変革を起こすことで、経済や社会に価値を生み出すのです。

コロナ禍という表現があります。新型コロナウイルス感染症は、今まで我われが経験し

たことのない「禍（わざわい）」であるにとらえる、ある意味日本的な表現なのかもしれません。諸外国であれば、もっと露骨な言い方をします。アメリカのトランプ大統領やフランスのマクロン大統領はコロナ危機を「我われは戦争のさなかにある」とたとえ、ドイツのメルケル首相も「第二次世界大戦以来の試練だ」と危機感をあらわにしました。ウイルスという見えない敵と戦う困難さをストレートに国民に訴えたのです。

今回の新型コロナウイルスによるパンデミックは、9月5日時点において、世界中で感染者 2646 万人、死亡者 87 万人を発生させ、現在もその脅威は続いています。その間も、感染の不安と闘いながら、最前線で生活インフラの継続にご尽力いただいている方々、またまさに感染者と対峙している現場の医師や看護師といった医療従事者の方々には、心から敬意を表し、感謝を申し上げます。こうしたいわゆる「エッセンシャルワーカー」の方々への感謝の気持ちは、コロナ禍において芽生えた新たな価値観でもあります。自分が生きていくために、身近な人々との連携や、社会機能維持に必要な組織・人々への配慮や支援の重要性が再認識された結果、我われの中で他者への配慮・思いやりの重要度が増したと考えられるのです。コロナ禍を契機として、社会的価値観が変わりつつあります。新しい社会像が求められているのです。

こうした社会変化は、コロナ禍後＝ポストコロナの世界における日本のポジションにもかかわってきます。「コロナ感染症の終息を目標に各国が巨額の財政を投じて対策に取り組んでいます。どの国が、いかに早く終息させるかによって、今後の国際秩序の形成に大きな影響がでるでしょう。」そうおっしゃるのは、外務大臣政務官を経験された文京区選出の辻清人衆議院議員です。世界が日本をどのように見ているのかを、辻代議士から伺いました。「日本は危機対応に必要な要素、すなわち国の結束、知力、技術力、慎重さを全て持った国である。島国で出入国を管理しやすく、対応も他国に比べると容易である。危機が終わったとき日本は国力を高めているだろう」というのが、ヨーロッパからの見方なのです。米中対立が深刻化し、世界のパワーバランスが不安定化するなか、既存の国際機関も機能不全をおこしていると言わざるをえません。そんな中、これまで国際社会への貢献を通じて培ってきた日本が持つソフトパワーで、国際秩序を再構築していくことは世界からも期待されているのです。

緊急事態宣言が発令され、我われはステイホーム、外出自粛を余儀なくされ、リモートワークやリモート学習を経験し、新しいコミュニケーションのツールやシステムを利用しました。これまで当たり前だと思われてきた常識が激変し、新しい生活様式や新しい価値観が登場してきました。コロナ禍を契機としたこの先の社会変化を考えなければなりません。コロナ禍が気づかせてくれた、とも言える、新たな社会に期待されるイノベーション像を思い描かなくてはなりません。禍転じて福となす、これを日本再生のきっかけとしなくてはならないのです。

「行政」というシステム、「医療」というシステム、「教育」というシステム、これらはサービスの主体が公である場合がほとんどで、そもそも競争原理が働きにくいということ

があります。加えて、サービスの受け手とサービスを供給する側では、圧倒的に供給サイドの力が強く、非対称的な関係性にあります。そのため、平時であれば自律的に進化するメカニズムが働きにくく、「これまで通り」という方向性を変えることには大きな困難が伴いました。しかしながら、コロナ危機を経て国民の価値観や技術に対する社会の受容性は確実に変化しています。これらの分野にはまたとない変革のチャンスが到来していると考えられるべきでしょう。

**そこでまず「行政」というシステムに求められるイノベーションについて伺います。**

コロナ禍で露呈したのはデジタル化の遅れでありましょう。2000年のIT基本法の施行やIT基本戦略の策定以降、日本では行政分野のデジタル化が掲げられてきました。昨年もデジタル手続法が制定され、「経済財政運営と改革の基本方針2019」においても、行政分野のデジタル化を推進する方針が示されていました。にもかかわらず、ふたを開けてみれば、区民1人当たり10万円を給付する定額給付金のバタバタであります。マイナポータルを活用したオンライン申請が利用可能であったのですが、郵送申請なら住民基本台帳の情報をもとに世帯情報が印字されていたのに、オンラインでは申請時に世帯情報を申請者本人が入力する必要があったことや、申請情報と住民基本台帳のデータが連携できずにいたため、その照合を結局自治体職員が目視で実施しなくてはならないことから、給付までに時間を要することとなり、オンライン申請を取り止める自治体まで出てきました。**行政手続きのデジタル化について、文京区が抱える課題を、コロナ禍を通じて明確になった点をふまえて、お答えください。**

法的背景としては、給付金でのマイナンバーの利用がマイナンバー法での利用範囲として想定されていなかったことがあります。仮に両データが連携できていれば、本人の申請作業や自治体での確認作業をより効率的に処理できていたことは明白です。政府も今回のコロナ禍での反省からマイナンバー制度の抜本的改善を進めてまいります。

行政分野のデジタル化は、手続きだけの問題ではありません。行政機関におけるデジタルインフラの整備についても同様であります。リモートワークやオンライン会議を利用すること。これを前提とした通信回線やシステムが、まだ十分には整備されていませんでした。にもかかわらず、職員の時差出勤や在宅勤務は否応なしに求められることになったのです。新型コロナウイルスの影響を受けた区民や区内企業に対して迅速な対応が必要であった**コロナ禍において、行政のデジタルインフラの不備によって、業務が滞ることがなかったのか。7月から運用が開始されたウェブ会議の実施状況などと合わせてお答えください。また、今後の展望についても、お示し下さい。**

行政分野のデジタル化は、これまでの延長線上でも進展は見込まれていました。しかしながら、コロナ禍で気づかされたことは、単にデジタル化を進めるだけでは意味がないということでもあります。たとえば、文京区が力を入れている「ひきこもり」の問題。複合的な課題を抱える区民の方からの相談にはリアルでの対応が不可欠です。目指すべきは、

リアルとデジタルを融合させた区民への行政サービスの質的向上ではないでしょうか。行政のデジタル化を進めることは、職員の事務手続き負担の軽減につながります。行政手続きがデジタルで完結すれば、窓口業務や確認作業等の負担は大きく軽減されます。その先にこそ、リアルでの対応が必要な行政サービスに職員の方々は時間を割くことができるようになるはずです。きめ細かなサービスの提供が可能となります。データや情報の連携ができれば、地域間で連動した行政サービスの提供も可能となるはずです。行政の業務をデジタルに完全に移行させることが最終的な目的なのではありません。デジタルで完結できるものはデジタルで完結させ、リアルでの対応が必要となる行政サービスについてはデジタル技術を活用しつつ、限られた地域の資源を有効活用することで、行政サービスの質を向上させることが可能になるのです。お尋ねします。こうしたリアルとデジタルを融合させた行政サービスの質的向上について、区の考えをお示し下さい。

**次に「医療」というシステムに求められるイノベーションについて伺います。**

新型コロナウイルス感染症の発生以降、我われは「医療崩壊」という言葉を連日、耳にしてきました。先進国であり医療技術・サービスが充実していると信じられてきた日本が、たった一つのウイルスによって医療崩壊のリスクにさらされるとは、誰も思っていなかったのではないのでしょうか。コロナ禍が浮き彫りにしたのは、医療資源の有限性という事実です。医療というのは、実は有限な社会的インフラであったという事実を、我われはあらためて認識させられたのです。「病気になったらいつでも医療サービスを受けられる」という暗黙の前提は、思い込みに過ぎなかったのかもしれないのです。

文京区では区内の医療機関と連携して、PCR検査センターを開設したという実績があります。医療資源を最適に利用するための試みを、手探りしながら実践したわけです。今後も感染拡大の波が幾度となく到来することが懸念される中で、有限な医療資源を最大限有効利用できる仕組みへの転換が一層求められます。患者はもちろん区民という生活者と、医療機関・医療従事者の双方にとって、長期的・安定的に維持しうる「レジリエント・モデル」の構築はコーディネーターとしての文京区の喫緊の課題となります。医療システムにおけるレジリエントな姿とは、いかなる状態であると考えられるのか。PCR検査センターの開設に伴って、文京区で考察されたことをお聞かせください。

現在、検査件数や正確な陽性率、実効再生産数などについては議論が起きているところですが、正確な検査件数を出すためには保健所や病院および診療所における情報が一元的に管理されることが重要です。患者のデータが電子的なプラットフォームにおいて一元的に管理されていないために、いまだにファックスで情報を伝達したり、あらためて保健所で入力するといった非効率的な運用体制が深刻な障害となっているという報告もあります。「医療という行為の大部分は情報処理である」と言われています。新たなレジリエント・モデルを構築していく上で、オンライン診療やデータ連携といった「デジタル」の力は、医療の効率化・生産性向上に大きく貢献するでしょう。同時に、社会全体でデジタルを活

用しつつ医療への安心感を確保するためには、生活者・患者、医師・医療機関、そしてそれらを支える自治体など、医療に関わるあらゆる参加者・プレーヤーが、相互に信頼・協力できる体制整備やルールづくりが不可欠となります。利用する区民にとって何よりも重要なのが、そうした信頼関係が目に見えるようになることです。文京区のホームページに掲載されている PCR 検査センターからの情報を、不十分だと感じてしまう区民の方がいることは、そうしたルールの伝え方自体が不十分であるということの帰結です。個人情報の扱いへの不安の払拭と、データ分析の観点からの情報の開示の仕方を、新たな情報処理のルールとして確立すべきです。区の考えをお示し下さい。

また、医療現場で必要となる医療機材について、国内生産体制の整備・強化を行うことを、政府は今年の7月17日に閣議決定しています。危機を克服し、新しい未来を目指すという方針が示されました。これまでほとんど「接触」で対応してきた医療・介護の分野でも、コロナ禍を受けて「非接触」での対応が進むと予想されています。新たな医療機材の開発が急務なのです。文京区は「メディカル Hongo プロジェクト」を経験しています。医工連携自治体協議会でコーディネーターを務めた経験があります。地域の代表者として要望を国に随時伝えていきましょう。必要に応じて国との折衝にも乗り出していきましょう。ポストコロナにおける新たな「メディカル Hongo プロジェクト」について、区の考えをお聞かせください。

**次に「教育」というシステムに求められるイノベーションについて伺います。**

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、初等中等教育では全国規模で休校措置がとられました。休校期間の指導のフォローが十分でないまま、家庭に委ねられることになったことは、認めざるをえません。地域や学校の教育資源や家庭における IT 環境、学習者本人の意欲や目的意識、保護者の関与度等の差が、学習機会の差そのものにつながってしまいました。公教育による支援が限定的であったのに対し、多くの民間教育事業者はオンライン教育コンテンツの拡充や無料提供を迅速に行いました。教育における外部リソース活用の価値が認識される一方、自治体や家庭での IT インフラの整備状況や外部リソースの活用の有無によって教育機会の格差が拡大することとなりました。その結果コロナ禍により学力格差は拡大したと考えられますが、区の見解をお聞かせください。

デジタル環境が整備されたとしても、オンライン授業では、協働学習の促しや学習者のモチベーションコントロールが難しいのです。既に習った内容の習熟教材としては比較的導入しやすいのですが、初等中等教育における新規概念の指導や、思考力、表現力、問題解決力の育成を行うには、コンテンツ作成者に指導および IT の高いスキルが求められます。オンライン教育の質を担保するには教員研修や現場での好事例の普及が必須といえますが、自治体や学校による単独の対応には限界があります。初等中等教育に関しては、現行の公教育が持つリソースのみでレジリエントな教育を担保することは難しいといわざるをえないと思いますが、区の見解をお聞かせください。

コロナ禍を契機にデジタル技術の受容性が高まり、教育の現場でも効率性が重視され、結果として教育の質的向上に資することについては期待したいと思います。行政サービスの質的向上と同じように、デジタルとリアルの融合が教育の質と効率性を向上させると考えるからです。デジタルを活用した教育の効率化については、いくつかの点で、速やかに取り組むことが可能だと思います。一つ目は、習熟教材の学校間での共有や外部活用です。AI を活用したアダプティブラーニングのエンジンや、音声認識・文字認識の技術を活用した即時採点による双方向性の教材など、多数の民間教育事業者がすでにコンテンツを提供しています。二つ目は、デジタルを活用した評価の充実です。膨大な情報を記録し共有できるのはデジタルの強みです。デジタルツールを活用して個々の学習者の学習プロセスや到達度を記録すれば、学習者を多面的に評価して効率的できめ細やかなサポートが、さらには指導改善を行うことも、成果のあった学習法の展開も可能になります。三つ目は、教員の働き方改革という側面です。定型化した業務や学校間で汎用的な業務については、デジタル化して教員の負荷軽減につなげるべきでしょう。教員の質の担保には働き方改革は必須の条件です。デジタルを活用した教育の効率化について、区の見解をお聞かせください。

日本では 1980 年代から知識偏重型教育を疑問視し、学習指導要領でも思考力・表現力・判断力や問題解決力の育成を謳ってきたわけですが、それが学校現場で定着しているとはなかなか言いがたい状況ではなかったのでしょうか。しかしながら今回のコロナ禍において、授業や試験を試行錯誤しつつオンライン化した経験を通じて、知識偏重型の指導が結局ウェブ検索から得られる情報の域を出ないことを改めて実感した先生方も多いのではないのでしょうか。また、未曾有のコロナ禍により先生自らが、既存の知識が通用しないという経験をしたことで、未知の課題に対応する力の必要性を認識したのではないのでしょうか。初等中等教育では、今回の危機を通じて蓄積された好事例に習い、民間教育事業者を含め外部リソースを積極的に取り込むということが、基本姿勢として求められるようになります。コロナ禍を契機に伝統的な学びのリデザインが進むことを期待したいと思います。

コロナ禍の中、世界中で売上げが増加しているという「古典」があります。古典といっても、発表されたのは 1947 年ですから今から 73 年前になります。「まるで現在の状況を予言しているかのようだ」と話題になっているその著書のタイトルは『ペスト』といいます。ペストという感染症に翻弄されながらも、その脅威に立ち向かっていく人々を描いた作品です。作者はアルベール・カミュ。ノーベル文学賞を受賞したフランスの小説家です。小説の主人公である医師リウーの台詞「こんな考え方はあるいは笑われるかもしれませんが、しかしペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです。…僕の場合には、つまり自分の職務を果すことだと心得ています」という言葉は、今まさに胸に迫ってくるものがあるのではないのでしょうか。誠実に、できることを、一つずつ積み重ねていくことを、政治家のひとりとして私もお誓い申し上げて、質問を終わります。ご静聴まことにありがとうございました。